

戦時中の村の暮らしを支えたお寺の娘さん



若林幸代（ユキヨ）さん（94）大正 9（1920）年 大阪江口村（現在の南江口）生まれ。江戸時代から続くとされる光照寺に生まれ江口村で育つ。大隅小学校（現・大隅西小学校）～市内女学校卒業後はお寺の仕事に従事。東淀川区在住

このあたりは「大阪の北海道」と言われてたんです。それくらい畑や苗代ばかりでした。小学校の思い出といえば、主人とは同級生だったんですが、満州国との親善に贈る絵として主人がギターやマンドリンの原寸大の絵を書いていたんです。それが手に取れば音がなりそうなくらい上手だったのを覚えています。

6年間小学校に通って、その後市内の女学校に4年間行きました。卒業してからは光照寺でお寺の仕事をするようになりました。農繁期にはお寺で託児所をして子どもを預かって、多い時は20人くらいの子どもの面倒を見ていましたよ。井高野からも来ていたくらい。

戦争がはじまったのは私が20才くらいの頃でしょうか。このあたりは田舎なので疎開する必要はなかったんです。近くの空き地に防空壕を掘ってあたりは穴だらけでした。防空壕といっても土を掘りっぱなしの穴でしょ。嫌がる母に入ってもらうのに苦労したのを覚えています。

⑫若林幸代さん

お寺の娘ということもあって、隣に住んでいる町会長さんから色々と頼まれて仕事を引き受けていました。一つは空襲警報が発令したら「空襲警報、は一つれ一い」とメガホンを持って江口村をまわる仕事。当時は電気もないし、(灯火管制で)村中真っ暗で何も見えないけれど、私は勝手を知っているから全然怖くなかった。

他にも兵隊さんが外泊する時に必要な証明書を発行したりもしていましたよ。知り合いに、橋本の遊郭で一泊したことを隠すため「江口村で二泊したという(嘘の)証明書を作ってくれ」と言われて、作ってあげたりもしました。命がけで軍隊行っている子の言うことくらい聞いてあげようと思ってね。

あとは配給物資を配る手伝い。分けるのも難しくてね。一人で暮らしているお家には、どうしても少なくなる。あまりにも少なくて、その人から「手でも炊けゆうんか」と言われたこともありました。戦時中もこの辺は畑が多くて自給自足みたいなもんやったので、麦やじゃがいも、さつまいもなんかはよく食べましたよ。戦時中でも法要を欠かすことはなかったし、お布施(昔はお米)でお仏飯を作ることができました。私自身はあまりひもじい思いをしたことはなかったと思います。同級生たちは軍需工場なんかに働きに行ったりしていたけど、私は村の役をしていたこともあって行かなくてよかったのかもしれないね。

空襲で怖かったのは、河内の6番(淀川岸についていた番号で対岸の守口あたり)に爆弾が落ちた時のこと。私は布団に入っていたんですが、あまりにも大きな音で、思わず布団かぶって「やられたー」って叫んだのを覚えています。後で聞けば、その辺りで戦地から帰って来た遺骨にろうそくを立てていたそうで、その光をめがけて爆弾落としたとちゃうかなんて言っていました。

神戸の空襲を淀川の土手から見ていたとき、言うべきことではないですけど、花火よりきれいだなあと思った記憶もあります。江口村は空襲の被害はなかったけれど、近くだと江口橋あたりに一度落ちて、畑のじゃがいもやたまねぎが全部吹き飛んだと聞いています。空襲で家を焼かれた人がここらに逃げて来たこともありましたね。近くで家を建てられるような場所を教えてあげたりしました。

戦争が終わった時は何とも感じなかった。たぶん役所から知らせが来たんでしょうね。とにかくもう防空壕に入らんでええんやと思った。それが一番嬉しかったですね。でも防空壕を埋めるのは大変でした。

戦争を知らない若い世代へ伝えたいこと？ 戦争は怖い、嫌なもん。それだけ。嫌やけど招集されたら行かないといけない。

⑫若林幸代さん

=====
お孫さん付き添いのもとでお話をうかがった若林さん。メガホンを持って空襲警報を告げてまわった情景や対岸に落ちた爆弾に驚いた時の様子など、それぞれの記憶は鮮明で、とても気さくに当時の思い出を明るく語ってくださった。小学校で同級生だったというご主人（故人）は戦争で中国へ。抑留され戦後1～2年後に帰還し、縁あって光照寺に婿養子にやってきたという。今回のインタビュー原稿は主に彼女自身の戦争体験のみについて編集してまとめたものである。約1時間のインタビュー終了後「おばあちゃんお疲れじゃないですか」という問いかけると、「そんなもん、これくらいで疲れるようやったらとうに死んでる」とユーモアあふれる返答をいただいた。